



武田清行さん たけだきよゆき
1937年生まれ。鬼北町遺族会会長を務める。昭和19年、父・賢さんが戦死。奈良在住・77歳



2
—戦時中の生活について教えてください。

武田 戦争中は、戦争に関する情報全てが秘密にされています。近所の人でさえ、父親がどこかの戦地に行っているのかを知らせることができませんでした。もちろん父から届いたハガキにも、戦地の状況は書かれて

いません。それだけ管理が厳しかったのです。

また、学校でも防空訓練がありました。空襲を受けたときの避難の仕方などを練習していましたね。日中でも空襲警報が鳴りますから、勉強も落ち着いてできません。毎日が戦争一色の日々でした。

毛利 幸い旧好藤村では大きな空襲はありませんでしたが、ある日、山の中で焼夷弾を見つけて、物珍しさに大人と一緒に見に行ったことがあります。今考えると、それが不発弾で、そのとき爆発していたら…と思うとぞっとしますね。

—戦時中、印象に残っていることはありますか。

毛利 宇和島空襲の日、宇和島市の上空が真っ赤に染

まった光景は今でも忘れることができせん。あの光景は、今でも覚えている方がたくさんいらつしやいます。

武田 それほど当時の私たちにとって衝撃的な光景でした。

毛利 また、たくさんのB29が編隊を組んで空を飛んでいた光景もよく覚えていますね。

—終戦を迎えて生活は変わりましたか。

武田 母親は苦勞したと思います。父親が亡くなり、一人で私たちが家族を支えていかなければならないのですから。苦勞を口にするとはありませんでした。姉もよく手伝っていましたよ。

毛利 母親の話では、都会の人に比べると食糧などで困ることはありませんでしたが、医療品や生活用品がなかなか手に入らなかったそうです。伝染病など、病気で亡くなる人も多くいました。

私の妹と弟も終戦後、赤痢にかかり2歳と3歳で命を落としました。葉がなく、助けてあげることができませんでした。母と祖父母の

苦悩は相当なものだったと思います。

当時の病院は、なかなか入院することができなかつたですからね。それに、入院することができるとは、治る見込みがほとんどない人たちがかりでした。リヤカーに乗せられて運ばれる病人の方たちを、何度か目にしたことがあります。

私の叔父は生きて帰国したものの、戦地で病気になるってしまいましたので、帰国後旧泉村の病院に入院しました。そして、その後すぐに22歳の若さで亡くなってしまいました。

—戦争を経験し、家族を失った2人だからこそ言えるメッセージをお願いします。

毛利 本当にひどい戦争でした。自分子どもたちや孫たちには二度と同じような思いはさせたくないと思っています。家族が無事に帰っ



1_武田清行さんの父・賢さん。出征前に撮影した写真が今も大切に保管されている 2_父親の戦死を告げる「死亡告知書」。どういった状況で亡くなったのかを記した「戦死状況書」や「弔門状」が添えられている 3_戦時中、女性の人たちが身に付けていた「大日本国防婦人会」のたすき。これを身に付けて防空訓練、消火訓練や竹やり訓練を行っていた。戦時中は男性が戦地に出ているため、女性が中心となって町や家族を守らなければならなかった

てくるのか分からない、そんな不安な日々を過ごすのは私たちの世代だけではないんです。

武田 これまで青年部、そして壮年部活動と、53年間遺族会に携わってきました。しかし最近では、戦争の記憶が日々風化されています。だからこそ、戦争の愚かさ、悲惨さ、平和の尊さを今、後世に語り継がなければなりません。

戦争は絶対に繰り返してはいけません。「戦争による遺族は我々まで」そう願ってやみません。70年続いた平和を、この先もずっと守り続けてほしいと思います。